



第147号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長 博
宮川
編集人 会報編集委員長 匡
滝澤 祥
印刷所 須坂新聞社

特集

継続実践の発表 第十三回研究発表会 第十二回女教師研究大会

十一月三十日(土)、須坂小学校視聴覚室において、会員百余名参加のもとに、第十三回研究発表会が開催され、本年度も三名の先生方により、発表がなされた。十二月五日(木)には、女性会員百五十余名の参加によって、同じ須坂小学校視聴覚室を会場に、多くの展示作品のなか、第十二回女教師研究大会が開催された。

本研究発表会は、会員が普段の研究成果を発表することを通して、自己錬磨に努め、会員相互の資質の向上に寄与するべく役割を担っている。今年度も昨年同様、持ち時間一人三十分として、三名の先生方に発表していただいた。発表者は「生活科の実践を通して」小林清美先生(仁礼小)、「須高における「緑の文化財」堀米富平先生(高山小)、「故郷須坂の歴史と文化を訪ねる遠足」和田吉先生(常盤中)であった。小林先生は、校内で中心になって研究を進めてきた、生活科への取り組みについて、VTRをまじえながら発表された。新学習指導要領の実施に伴い、来年度から始まる生活科

を、数々の授業より研究分析をなされており、大変参考になった。堀米先生は、本誌でも連載されている須高の自然について、スライドを用いて、たくさん紹介して下さい、それまで須高に生息しているなどとは思わなかった植物があることに驚かされた。和田先生は、中学で行われている市内の探索遠足から、生徒が主体的に取り組む、価値ある体験を得ることが出来る実践をスライドや、御自身が、今まで研究なされてきたことをまじえて発表して下さい。

一方、女教師研究大会は、「人間性豊かな児童生徒を育てるために、私たちはどのようにならなければならないのか」と共に伸びてゆく女教師のあり方を求めてのテーマのもと、会員の先生方の書、絵画、手芸、生け花等の作品に囲まれて、開催された。委員報告からは、分散会形式の研究会の成果が発表され、会員全員の宝となるような研修をめぐらした委員会の熱意が伝わってきた。今年度は、会員二人の発表もあり、中澤洋子先生(須坂小)は、「海外旅行よもやま話」として、御自分の豊富な海外旅行体験を生かして、実際に役立つ事柄を多く話して下さい。牧千恵子先生(墨坂中)は、「自分が今こうしていられるのは」という題で、同僚の先生方、生徒達、家族の支えにより歩んできた体験を、ユーモアをまじえて話して下さい。

生活科の実践を通して

小林 清美

来年度から完全実施される生活科ですが、まだまだ手さぐり状態の学校や先生方が多いのではないのでしょうか。もちろん私もそのうちの一人です。

私の勤務している仁礼小学校では、昨年度から重点教科の一つとして、生活科に取り組んできました。私も、昨年度から一年生を担当させて頂き、現在、二年生の子どもたちと共に、生活科に取り組んでいます。

昨年度から、理科・社会という教科をなくし、いきなり生活科としてスタートしたわけですが、教科書はないし、単元展開から単元の目標、教材研究等、すべて無からのスタートでした。故に「何をすれば良いのかさっぱりわからない」といった状態でしたが、裏を返せば、まだ何も決められていない教科であるが上に「何でも考え、やってみたい」というおもしろさもあったわけでした。

一年生の「秋とあそぼう」の単元では、クラス全員で、秋さがしに出かけ、自然の中で思いきり遊びました。どの子も、教室の中での表情とは

違い、のびのびと大変楽しそうでした。この単元をきっかけに、家に帰ってからの子どもたちの遊びが、変化してきました。それまでは、一人で、家の中の遊びが多かったのですが、だんだん外で遊ぶ子が増え、遊ぶ人数も多



くなり、中には、男女いっしょに、違う町の子も集まり、近くの山へ探検に出かけた子どもたちもいました。

二年になり、生活科ができるのは今年だけなので、「とにかくいろいろな体験をさせたい」という気持ちを大切に

して、何でもやらせてみよう。という心構えで生活科に望みました。「仁礼探検」の単元では、「自分の家紹介」や「遊び場紹介」を通して、受け身の姿勢から自主的・主体的な姿勢へと変わってきました。また、子ども達の願いを受けて行った「よもぎもち作り」の活動では、協力し合ったり、様々な工夫をする姿が見られました。「夏を楽しむ」の単元では、「大きなふね作り」の活動を通して、友だちと協力することの良さを多くの子が感じるようになりました。中には、個々の願いが満足できず、グループの活動に関われない子もいました。そこで、「わたしのおたよりを出そう」の単元では、牛乳パックのはがき作りで、個々の願いが十分に満足できる活動を組んだところ、自然に友との関わりも生まれてきました。

生活科は、一年目だけ見ると、どんな力がついたのかわかりませんが、今のクラスの子どもたちを見てみると、確かに自主性が育ってきていると感じます。自分たちでやろうとする意欲や、活動力もついてきました。自立への基礎を養う教科—生活科は、これから大切な教科になってくると思っています。(仁礼小)

須坂・上高井地区に おける自然的文化財

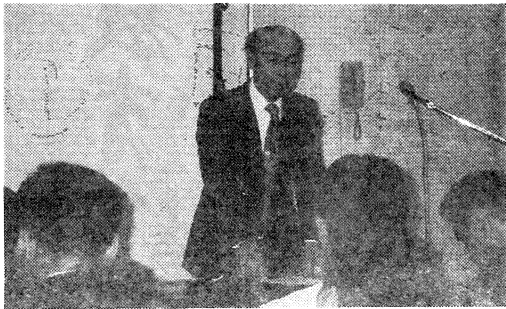
—植物を中心に—

堀米 富平

人間は社会生活を営む社会人であると共に自然の中に生きる自然人の一面を持つ。なお人体自体生物体であり自然とは離れることができない。現在の須高の貴重な自然(巨木、分布希品、注目生態、特長的地質等)を調査研究した中からシンボリック的に発表したい。

延命地藏堂
のエドヒガン、須高山野に自生品はない、須高第一級の名木、根廻り5・9m。万竜寺のクマス干須坂市指定文化財樹齢三百余年、須高スギの先駆的存在。

長妙寺のイチヨウ、イチヨウでは大洞観音、興国寺のものとは並ぶ巨木である。小坂神社社叢、樹齢300(600年ケヤキ巨木23本、県下に稀なケヤキ純林の社叢、墨坂神社社叢もケヤキ巨木(直径1m以上を巨木と言う)純林で市文化財に指定されている。新田のクヌギ、鎌倉以降中世文献に散見するくぬぎ原の庄(須高の俗名)の面影を代表する。豊宮神社、北小河原神社にも神木の巨木クヌギが見られる。乳山のミヤマツツトリモチ、発生面積が約5ha



と広く、夏緑広葉樹に寄生していることが珍しい。楨形のダイチヨウの木、幹囲6・8m、長野盆地で三傑、大谷不動のモトゲイタヤ、米子東照寺のコウヤモミジ、カエデ類巨木は須高にこの二本だけ珍品。五味池のハイマツ、1700mの低標高、谷風吹上げの冷気が奏巧。須高ハイマツは笠岳山頂、根子岳山頂にだけ見られる。五味池大台が原の枯株、数十年前の伐採跡、須高では枯れの原因にこの他に老樹、寒波、火山性ガスに依るものがある。五味池のレンゲツツジ大群落、「市

の花」、内陸性、陽樹として牧場伐採地後に広がった。山田牧場シナノキ巨木、ウラジロモミ巨木、県下稀の群生地、高井高杜神社スギ並木、長野地方の平坦地では最高、雁田の薬師堂スギ並木も平坦地のものとしてすばらしい。牧の小安神社のケヤキ巨木、高山村指定文化財、三沢山頂のアカミノイヌツゲ群落、高山村役場のイチイ、高山村村木、山田牧場から移植、牧場に天然イチイ散生。水中鹿島神社のシダレザクラ巨木、村指定文化財、学名上エドヒガンの母種に誤認されている。

京都のベニシダレが須高に近年植えられ始めている。臥竜山の根上りねじれ松、山頂稜線沿い老樹に発生、左巻、天徳寺のアカマツ巨木、市内最大。山田牧場のトチノキ巨木、小山小学校のトチノキ巨木、トチノキが巨木として残っているのは須高で稀。両品とも北方型のケトチノキである。別府のオニグルミ、八木沢川流域代表はオニグルミ、松川扇状地末端の湧水のうるおいを得ている。旧法泉天然記念物、現在解除、須高に天然記念物県指定皆無は惜しい)宇原川上流のブナ巨木、筆者調査で発見、日本海型でブナ南限。須高のオナガ、カッコウの被托卵鳥として近年世界鳥学会の注目。小布施皇太神宮のケヤキ、ケヤキは地下水潤沢肥沃地を好む人里の木。

(高山小)

「故郷須坂の歴史と文化を訪ねる 遠足」の指導上の留意点

和田 邑吉

「故郷須坂の歴史と文化を訪ねる遠足」の実践を雑誌「信濃教育」に発表してから今夏は県教育センターの講座で講師に依頼されたりした。その後、今、私が一番考えさせられていることは、地域に散在する教育的素材を如何なる形で生徒に提供するのが最善かということである。いわば「教材集の制作」であるが、これは発表会には不適切なので、当日はごらんのような標題で問題提起をした。プリントやスライドでは常盤中遠足の実情を紹介しながら平成元年度と平成三年度の実践を対比し、背景の変容ぶりを紹介することにした。

一、生徒達と寺境内を清掃しているとき、小さな観世音菩薩像をみつけた。墓碑銘に「美恵妙寿大姉・智正童子・洋月嬰兒」碑陰に「昭和廿年八月十四日、満州国於珠山自決」「寿恵子廿八歳、正夫七歳、洋二一歳」と四行に刻まれている。これを見ながら生徒と語り合ったことや、それからの生徒が「流れる星は生きている」や「望郷」にとびついたことは、ここでは省略する。

二、生徒達が芝宮の参道を



入って行くと両脇に林立する石燈籠が目につく。刻字から年々の年男達が奉げたものかわかる。丁卯とか戊辰とかいう字の読み方がわからなくて学校に戻ってから千十二支を学ぼうになったことは言うまでもない。翌年度の生徒たちは自分の千支の灯をバツ

- (1) 教育課程に位置づけ、全教科が「遠足」の充実に参画する。
- (2) 価値ある体験となるように対象と時を工夫する。(神社・寺・建物・道路・標識・水道・集落・顕彰碑・句碑歌碑・記念碑など)
- (3) 師弟同行で教師も生の感動を体験して行く。
- (4) グループは、生活班よりコース別とか問題別に編成。
- (5) 地域の人々と接するのでボランティア団体との連絡を。
- (6) 遠足をして終らせずに学校祭などの学級展示テーマに据える。
- (7) 「今年判ったこと」と「まだ判らないこと」を記録にとどめ、次年度の学年に解明してもらおうように申し継ぐ。
- (8) 資料集は、教師が未完成のもの提示し、生徒各自が完成していくようなものがよい。疑問が残ったまま卒業することになることも生涯学習の視点からは望ましい。

(常盤中)

女教師研究大会

委員会報告

副委員長 田所 道子

「自分たちが研修を積んで人間として幅を広げることが子どものよい成長につながる」よく言われるあたりまえのことだ。昨年度、当委員会では「子どもの理解の上に立った指導のあり方」ということで指導の仮説をもって、子供とつき合ってその変容をみとる研究をすすめた。その結果、やっぱり最後に行き着くところはそこだった。委員は、会を進めると自分の接している子どもとともに、わずかなではあるが、自分自身の成長をみとることができたように思う。研究の結果を冊子にまとめ、郡や県の大会において発表もさせていただいた。しかし、この委員会活動がもっと多くの仲間のもので広がっていくことが大事ではないか。どうしたら多くの先生方のものとして機能できるか。本年度はちょっと角度を変えて考えていくことになった。力量を高め、子どもに寄り添った指導ができるようになりたい。そのために子どもを知りたい。教材を知りたい。指導方法を知りたい。心のゆとりが欲しい。自分自身が高まりたい。等々多岐にわたった願いに対応するために分散会形式の研修会を持つことになった。アドバイザーも身近

な関係者をお願いができた。希望する分散会に気楽に参加できたことで、充実した一時を過ごすことができた。詳しいことは冊子にまとめあるので目を通して、また意見を聞かせていただけるとありがたい。

先日の大会のおりにその時の様子をスライドを交えて発表させていただいた。一回の研修でどれほどというものもないが、その心意気は伝わったと思う。昨年度から今年は委員の意見発表をということだったが、お二人のユーモアあふれるお話からも私たちは活力を与えられた。「ふっと一人でちょっと」という感覚で日本を離れ異国の地を旅して一年分？の生活必需品を安く買い込んでくるという中澤先生のバイタリティー。

今まで歩まれてきたことから、今受け持っておられる生徒との日常のやり取りのお話の中にあふれる牧先生の前向きな姿勢。優しさ。温かさ。思わず引き込まれてしまった。毎年のことであるが、忙しい忙しいと時間に追われる中で上手にやりくりして作られたであろう素晴らしい作品も並べられた。多くの方々のご協力があった研究大会も終わって。感謝申し上げます。(相森中)

今の私を支えているもの

牧 千恵子

私の初任地は、下伊那でした。家族からの煩わしさから解放され喜んでいたのでありますが母は毎日裏山に向かって私の名を呼び無事を祈っていたそうです。親というのはありがたいものです。その後、須坂の常盤中学に勤務致しました。家庭科は一人でしたので、郡市の先生方と共に学びました。その頃の先生方は後々まで研究仲間として、私たちを支えてくれています。

三十歳代は長野市で過ごしました。大きな学校でしたので教科会の人数も多く、そこで先輩の先生方から、教科研究のあり方、研究授業の教案作り等教えていただき、また各種の研究会にレポートを持って参加したり、意見を求められたりと、この十年間は家庭科の教科の学習をしっかりとしてさせていただきました。

四十歳になり須坂市に戻って参りました。待っていたものは、研究授業、婦人部、女教師、教科会の委員長等々。人の先頭に立ってまをしっかりと学びました。いろいろな経験は、なるべく若いうちに

海外旅行よもやま話

中澤 洋子

乏しい旅の経験の中から、こういうことは知っておくところがあるに役立つことがあるかも知れない、と思われることはいくつかをお話します。

①旅を楽しむ続けていける最大の秘訣は、旅の途中で恐怖、不愉快、病気やけがなどの憂き目にあわずに帰ってくること

②タクシーは、使い方によって安全で便利な乗り物。ダウンタウンの「夜の顔」を楽しむに、ホテルの部屋から飛び出そう。

③チップは便利な慣習。ナントカとチップは使わないうことあり。これ、つまり人を利用しないという手はない。ただ使ったときによりがち、後で「高くつく」という怖い目にあう心配もなく、気分もなかなか。

④次に乗り継ぐ便が同じ航空会社のものだったら、はじめの空港で次の便の搭乗券ももらっておこう。安心だし、乗り継ぎの際の時間的余裕もできる。外国の航空会社の便を利用する場合、出発一週間前にはリコンファームも忘れずに。

⑤観光地以外では、写真を撮る時一応許可を得よう。ダメと言われても、訪れたことと撮影禁止だったことの証拠写真はトイレで撮れる。外国に住所を移し、日本を長期に渡って離れる際には、役所からの書類が必要となることはないか一通りチェックが必要。

⑦外国ではパスポートが第二の命。持ち歩かなければならないことも多いけれど、絶対になくしてはならない大事な品物。万一の時のために必ずナンバールを控えておこう。

⑧スーツケースの半分と片手はおみやげのために空けておく。買い物は、予めよく調査研究し厳選した「ここではこれを」というものと、時間とお金をかけずパッパッと買う。思い出のための品物とに分けて、時間的にも経済的にも能率よく済ませる。思い出のための品物には後のコレクションになるようなテーマを、おみやげならこれを、と決めておく。無用な迷いの予防になる。生活消費材が豊富でバカ安のスーパーマーケットや病院の売店も必見。買えば買う程後の家計が助かるはず。海外旅行でちょっとお金を使いすぎたかなあと反省の方にオススメ。

⑨旅の恥はかき捨て。かいて躊躇するより、色々なことに挑戦して得るものを多くしよう。⑩の名文句を武器にさああなたも海外へ。私も「仕事に病んでも夢は海外をかける。」

郡研究発表会

に参加して

田中かおる

研究発表会などというところ、つい行くのがおっくうになってしまふ私ですが、教師になって三年目にして今年初めて参加してみました。そして、その感想は「参加して損はない、収穫は多かったな。」ということとです。特に仁礼小の小林清美先生の発表をお聞きして、今までの私を深く反省してしまいました。

実は同じような感想は、清美先生の授業を教育課程で観せていただいた時にも持った

参加者の声

郡研究発表会

に参加して

手塚 直樹

私はこの春、ここ須坂の地で教員としてのスタートをきりました。専門が中学の社会科という事で、興味深く聞かせていただきました。和田先生の碑についてのご研究は地域素材の教材化という点で大変参考にさせていただきました。同時に、私自身一層の教材研究に励まなければならぬと奮起させられました。また、堀米先生の長年にわたる貴重な須高地区の樹木の研究発表では、確固たる自信に基づいた

女教師研究大会

に参加して

早川智香子

一度注意したことが実行できない、自主的に活動できない。そんな我がクラスの子ども達の態度にイライラしながら学校を出て臨んだ女教師研究大会。自分の力不足を情けなく思ってしまった。それだけに、今回の研究会は、また明日へのエネルギーを持つ良い機会となりました。

緊張していると言いつつも、目を輝かせて海外旅行の話をする中澤先生を拝見して、「ああ教師ってポケットから出すばかりでは息切れしてしまう、しっかり充電しなくては輝いていることはできないのだなあ」と、しみじみ感じました。また、初めて担任になられたという、大先輩牧先生の前向きな姿勢と熱意には本当に心を打たれました。生徒の手をにぎりながら話をなさるといふことをお聞きして、自分は子ども達ひとりひとりの想いを大切にうけとめているだろうかーと反省させられました。

夏には、女教師研修会にも参加させていただきましたが、大変勉強になり良かったと思います。日々どんなに忙しくても、目の前の子どもたちのため、そして自分自身のためにも、学ぶ意欲だけは失われないようにしたいと思います。(小山小)

校章・校歌めぐり

常盤中学校



常中三十周年記念沿革誌によると、校章のできたのは、学制改革で昭和二十二年四月、須坂中学が生まれたその年の二学期頃さまったようである。そして、そのまま常中の今の校章として続いているのである。

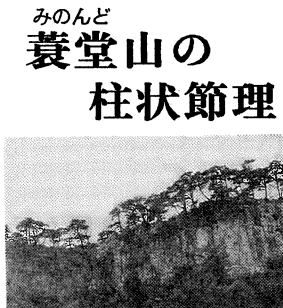
須坂中学校が創立した昭和二十二年四月から、美術の宮原正夫先生と北島徳誠先生のお二人が中心となって心配され、初め全校生徒から募集したけれども、思わしいものが出なかった。そこで、

須坂中学校校歌

須坂中学校校歌の楽譜と歌詞が記載されている。

須高の自然

堀米 富平



米子部落中村と下組の背後にまっ白の岩肌を立ち並べた稜線が東西に伸びている。有名な養堂山である。下を養堂堅道が貫いている。見上げる柱状節理の断崖は枝振りの美しいアカマツを乗せて見事な景観を見せている。養堂山は古く地質時代に四阿山噴火の際に米子の川を流れ下った熱雲状態の噴出物が堆積、後の浸食に耐えて残ったものである。この奥に鳴岩堅道の柱状節理、四阿山の岩の柱状節理がある。養堂山に産する熔結凝灰岩のなつかわ岩は園芸家に愛されている。

岩鼻に信濃三十三番観音札所の第九番養堂観音が祀られてきており霊場の山でもある。観応三年(一三三三)米子城の戦に尊氏方について闘った小笠原、高梨、須田氏等が立籠った所、要塞でもある。(高山小)

編集後記

(小林吉夫)

組み合わせを背景に須坂のマークを入れ、中心に「中」の字を配したものの。ペンは、学問と文化とか真理とかを象徴するもので、ペンの三本は構成上のバランスがとれるようにしたものである。

校歌の制定は、二十六年に山岸吉治校長の発案により、当時の常盤中学校職員であった北島茂氏が中心になって、校歌詞の原文をつくった。山岸校長と北島茂氏は何回か原文を練り直し、その原文をもとにして、四賀光子先生に作詩していただくことになった。作曲は、木下保先生にお願いして詞も曲も格調の高い校歌といわれている。二十六年の秋ごろには、全校で歌われるようになったという。

遠く山々はすっかり雪化粧をしました。里はいつもより暖かいです。これからは冬本番となります。いかがが過ぎようかと。さて、本号では「第十三回研究発表会」第十二回女教師研究大会の特集を組みました。両会とも、多数の参加者の中で、充実した発表が行われ、有意義なものとなりました。年の瀬もおし迫り、先生方におかれましては、お忙しい毎日のことと存じます。今回原稿をお寄せ下さいました先生方に、心からお礼を申し上げます。皆様、良いお年をお迎え下さい。(牛山・小野)